

# 小野 一 一 郎 研 究

- 「小野 一 一 郎 著 作 集」より -

「日本の移民問題(1)」

本山ゼミナール

報告者・鈴木 啓史

## 著者紹介

小野 一 一 郎 (おの・かずいちろう)

1925年10月10日 大阪市に生まれる。

1945年 京都帝国大学経済学部入学。

1949年 卒業(この間、1944年12月入隊、中国大陸派遣、1946年2月本土帰還)。

大阪銀行(現住友銀行)、大阪市研究員・大阪市立大学経済研究所勤務を経て、

1951年 京都大学経済学部助手。講師、助教授を経て、

1970年 京都大学経済学部教授。経済学部長・大学院経済学研究科長を歴任。

1989年 京都大学退官、京都大学名誉教授。

同年 阪南大学商学部教授。阪南大学図書館長(1991・4～1993・3)。

1996年 阪南大学退職。

1996年12月7日 永眠。勲二等瑞宝章正四位を受ける。

編著書 『ブラジル移民実態調査』有斐閣、1955年。『世界経済と帝国主義』(共編)

有斐閣、1973年。『南北問題入門』(共編)有斐閣、1979年。『両大戦間

期のアジアと日本』(共編)大月書店、1979年。『南北問題の経済学』同

文館出版、1981年。『戦間期の日本帝国主義』世界思想社、1985年。『国

際流通とマーケティング』(共監修)同文館出版、1992年。『日本貿易の史

的展開』(日本貿易史研究会編)三嶺書房、1997年。

訳書 M.ドップ『後進国の経済発展と経済機構』有斐閣、1956年。A.I.ブルー

ムフィールド『金本位制と国際金融 1880-1914年』(共訳)日本評論社、

1975年。

以上の他に、学術論文約90、調査、辞典項目執筆、その他多数。

京都大学「世界経済論」が京都帝国大学法科大学の「商業経済論」を始祖としていることに起因する。

## 「世界経済論」担当者の変遷(『京都大学百年史』(1997年)より)

「世界経済論」の前身

・ 京都帝国大学法科大学時代に「商業経済学」の一部として講義されていた外国貿易論

「外国貿易論」が科目となったのは経済学部の創設時からであった。

当初の講義担当者は戸田海市

『商業経済論』(1924年)第2編第1章に収められている外国貿易論

古典派貿易論に立脚しつつ、近代的な要素価格論を独自の形で包摂したもの

・ 大正11(1922)年になって、「外国貿易論」は「国際経済論」と改称される

最初の担当者は作田荘一

大正9年『世界経済学』(1933年)

「国家の本質を追究しつつ、「国際経済」と「万民経済」とを包摂する世界経済学の確立を目指すものであった」

以降、本学部では、国際経済論と内容的には区別された世界経済論が今日まで講じられ

ることになった。

World Economy VS International Economy  
歴史は不均衡で複線的 歴史は単線

作田の後には、柴田敬、松岡孝児が引き継いだ。

「特に松岡は、国際金融論の中に後進国問題を位置付け、国際金融システムに見られる金融の支配・従属関係を抽出した」

『金為替本位制の研究』（1936年）

・「国際経済論」に代わって正式に「世界経済論」が開講され始めたのは、戦後の昭和23（1948）年

松井清が担当した。

前身の講座を継いで世界経済論講座と改称されたのは、昭和38年

#### ・松井清

・「伝統的な古典派貿易論と近代貿易論の批判的な検討を通じて、日本で初めてマルクス主義的な体系的な世界経済学を構築」

同分野における指導的役割を果たした。

『世界経済論体系』（1963年）、『低開発国経済論』（1967年）が代表作

#### ・松井を継いだのは小野一一郎

小野一一郎

- ・貿易論と国際金融論との結合に腐心し、世界経済学に綿密な歴史分析を取り入れた。  
「幕末開港期の「東亜におけるメキシコドルをめぐる角逐とその本質」を追究した研究は、世界経済システムに包摂されながら変化する日本経済の金融的体質を初めて浮き彫りにした業績として、国際金融史の分野に大きな影響を与えた」
- ・「また、小野は、日本における金本位制の成立と当時の国際金融体制との関連を考察し、注目された」

#### ・次いで「世界経済論」を担当した本山美彦

本山美彦

- ・「各国民経済間で作用する力学を重視する国際経済学とは峻別する形で、世界システムを基軸に置く世界経済学の理論・歴史・現状分析を一層発展させようとしてきた」
- ・代表作は『貨幣と世界システム』（1986年）、『豊かな国、貧しい国』（1991年）

従属地域から見た国際金融史を通して世界システムの展開を扱ったものである。

#### ・平成5（1993）年には、岩本武和が着任

国際金融に重点を置いた研究を進めている。

『世界経済論各論』 現在 『国際経済政策』

「世界経済論」は京大から消えるのか？

## 研究目的

本年、は日本海海戦から100年、太平洋戦争の敗戦から60年にあたる。すでに、我々が敗戦を見る年齢(60年)よりも敗戦から、すなわち日本帝国海軍の滅亡から日本海海戦の勝利を見る年齢(40年)よりも20年も長くなってしまったのである。しかし、この時期に改めて、我が国の100年を振り返る必要がある。そのためにも小野一郎研究は必要である。また、小野一郎がわれわれ本山ゼミナール「世界経済論」の孫弟子にあたることから、ぜひとも避けて通ることができない研究といえる。

今回はこのことをふまえて小野一郎著作集第三巻『資本輸出・開発と移民問題』「日本の移民問題(1) - 日本移民の展開過程 - その特質と変化」の研究が必要である。また、今回は割愛したが「日本帝国主義と移民論 - 日露戦後の移民論 - 」の研究も必要であると思われる。

『小野一郎著作集 』(ミネルバ書房)  
「まえがき」(本山美彦)要約

## 第一巻より

一九九六年一二月に急逝された故小野一郎先生の著作集

第一巻『近代日本幣制と東アジア銀貨圏』

第二巻『日本資本主義と貿易問題』

第三巻『資本輸出・開発と移民問題』

・第一巻は、生前の小野先生が生前にご自身で作成されていた編集プランに沿うもの

- ・日本の他の多くの社会現象と同じく、日本の貨幣制度の変革はつねに外からやってきた。
- ・遅れて世界市場に参入した日本は、すでに確立していたアングロサクソンの国際通貨環境が押しつける論理に自らを適合させなければならなかった。
- ・日本が生糸貿易を挺子に近代化に乗り出したとき、まず直面したのが、貿易に使用する通貨を安定的に支配することができなかつたという事情であった。
- ・通貨情勢はメキシコドルによって支配されていた。
- ・金属鑄貨であるメキシコドルといえども、政治・経済状況に対して、けっして中立的なものではない。
- ・メキシコドルを縦横に駆使できる外国の商社、銀行の思惑に日本は振り回され続けた。
- ・日本は、懸命になって自国が支配できる貿易銀貨を流通させようとしたが、その努力は水泡に帰し、結局は、目の前の国際通貨秩序に合わせて、自らを変革しなければならなかった。
- ・金本位制採用にしても、それはけっして、日本が自力で確立してきたものではなかつた。つねに、アングロサクソンの世界組織の側迫を受けて、絶えざる自己変革の軌跡を日本は示さざるをえなかつた。

「小野先生の叙述の特徴は、歴史に生きた人物を生き生きと描き分ける点にある。ある政策が採用される歴史の、結節点に配置された人物の選択を説明する小野流叙述は、堅い経済史というよりは、流麗にして雄大な歴史小説を読むような雰囲気である」

## 第二巻より

・小野一一郎京都大学名誉教授の研究は、貨幣・資本移動、外国貿易、労働力移民といった国際経済学の基本三分野を網羅するものであった。

「生前の小野先生は、『近代日本幣制の展開と東アジア銀貨圏 - 円とメキシコドル』と『日本資本主義と貿易問題』という二冊の著書の編集を試みておられた。さらに先生は、ご自身の業績を研究分野別に分類・整理した「著作目録」も作成しておられた。その目録には、先生の自己評価が付されていた」

・小野一一郎先生の書誌学に関する知識の豊富さに、人は驚嘆させられたものである。

・中でも、日本の植民地政策に関する文献、および、植民政策の策定に携わった人物像については非常に詳しくあった。

・先生は、光のあたる華やかな道を歩いた大物の側で、それを支えていた無名の人物を発掘することに無常の喜びを見出されていた

・先生の経済学には経済学者としては珍しく、歴史小説家のごとく、その時代の登場人物のじつに生き生きとした叙述が敬りばめられていた。

「先生が語られる人物像のあまりの面白さに、私たちは時間を忘れて引き込まれていた。先生のそうしたお話を研究会の後にお聞きすることが私たちの本当の楽しみであった。ただし、長話をしすぎて、百万遍の喫茶店の店主のあきれ顔に気付いて申し訳ない思いも幾たびかした」

・先生の書誌学の深さに触発されて、せっせと古書店に通う習慣を身に付けたのも小野先生の門下生の共通体験である。

・貿易と植民地問題を扱ったこの第二巻で、先生の経済学の上記の特長を味読していただきたい。

・なお本巻末尾の沖縄におけるドル切替え問題は、沖縄の問題を経済学、貨幣論の分野から検討したもので、日本のみならず、世界的に見ても貴重な貢献であると思われる。

### 第三巻より

・優れた研究というものは、すべてそういうものであるが、小野一一郎先生のご研究も、先生ご自身の強烈な体験を基礎にしている。

・研究会後、百万遍の喫茶店で懐かしそうに私たちに語って下さった先生のご経験が、先生の諸論攷を生み出している経緯を聴いて、私たちは胸を躍らせたものである。

・先生は、京都大学経済学部学生のまま、学徒動員で中国大陸の戦地に投入させられ、部隊が乗っていた輸送船が米軍の魚雷を受けて撃沈され、米軍に救出される経験をされた。

・「これで我が人生の終わりか」と覚悟されたときに東シナ海の夕陽がじつに美しかったと先生は語られた。その際の米国人の明るさに先生は感銘を受けられたという。

・終戦を迎えた部隊が現地で解散し、敗戦の大混乱のさ中、先生は事情の分からない中国大陸に放り出されてしまった。それこそ日本兵に向けられた現地の憎悪の中、先生は、中国大陸の各地で行商をして生き延びられた。

そのときに体験した八路車の規律ある行動のさわやかさ、その溢れる人間愛に、先生は万感の思いで感謝の念をいつも表明されていた。このときの強烈なご自身の体験が、先生の学問を形成したことはまず間違いない。

・貨幣制度を扱った第一巻

「経済混乱が生み出す通貨混乱の悲惨さをいやというほどご経験された大陸における先生ご自身の行商による彷徨の思い出から生み出された作品群である」

先生の京都大学退官記念講義は、「単一円レート決定の顛末」(一九八九年)であった。

・第二巻は

「日本の軍事的体質を生み出した日本の置かれていた外的状況を説明した名和三環節論の正しさを中国大陸で骨身にしみて感じられた先生が、それを実証されようとしたものである」

・さらに、戦後の円問題を再確認する意味もあって沖縄でのドル切替え問題が論じられた。

・第三巻は

「資本輸出、開発、移民、に関するものであるが、これも先生の終戦の大混乱期の中国で先生が直面した問題を確認するものであった」

・大陸に遺棄された日本の移民のホームグラウンド喪失態に、先生は強烈な印象を受けられたという。国際経済学が当時はないがしろにしていた移民問題を先生は非常なる情熱を込めて研究された。

・先生のご研究は、文献に通暁されていながら、いわゆる文献学には終わっていない。

・先生の業績は、つねに、人間の生の息吹を伝えるものであった。

・青春の辛いご体験がそうした学風を生み出したのであらうと私は確信している。

## 日本の移民問題(1)

### - 日本移民の展開過程 その特質と変化 -

(初出『ブラジル移民実態調査報告 附日本移民問題』有斐閣、一九五五年九月)

#### 第一節 移民問題の動向とその本質

・国際移民の流れは第一次大戦を転期として一つの新しい段階に入った。

レーニンはこのことを、一九二一年コミンテルン第三回世界大会において指摘している。

・しかし国際的な移民の縮小化の萌芽はすでに一九世紀末から二〇世紀の初頭の間、すなわち帝国主義段階の成立期にはじまっている。

一九世紀末(一八八 年代)より第一次世界大戦の起った一九一四年。

カナダ、アメリカ、オーストラリアそして南アが相ついで中国人、日本人、インド人に対し、その移民を禁止あるいは制限した。

・黄色移民制限禁止にはじまる移民制限の歴史は第一次大戦後いっそう強化され、たんに黄色移民のみでなくヨーロッパ移民(とくに東欧・南欧移民について)もまた最大の移民吸収地たる新大陸からしだいに遠ざけられねばならなかった。

・このような移民制限と減少の論理は何であったか。

二つの点に要約できる。

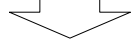
第一

・それは一九世紀後半なお上昇を辿った資本主義が独占・帝国主義段階に突入し、すでに停滞と衰退を示しはじめ恐慌は全世界を包括する世界恐慌として現われるにいたるとともに、慢性的な不況が全資本主義体制の上に蔽いかぶさり、その結果巨大な移民吸収力を示す地域が消滅したことに原因する。

## 第二

・移民の流入は流入国の労働市場をいっそう圧迫し、労働者間の競争は膨大な失業者群の恒常的存在を余儀なくされているこの段階において賃銀水準を押し下げ、そこから生ずる自国労働者の反感と反抗は、帝国主義段階においていっそうはげしくなった階級闘争を、より激化するものとして現われるにいたった。

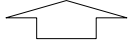
・こうして従来移民の流入にその利益（労賃低下と地価騰貴の利益）を感じた流入国支配層も、それら階級意識の覚醒を欺瞞し、鎮圧する手役として国家民族意識を強調することを余儀なくされる。



この**統一的民族国家意識の成立をさまたげる異人種（特に黄色人種）の移民をまず制限禁止**することになったのである。



- ・なぜなら**共通な種族（白人）意識の存在と強調こそ、統一民族国家意識成立の最初のかつ最大のファクターであり、階級支配欺瞞の最大のヴェール。**
- ・**アメリカおよびイギリス帝国主義の安定的な支配の維持に必要な手段だった。**
- ・しかし移民吸収力が弱体化し移民が制限され、移民が減少すればするほど移民問題は資本にとって事態が非常に切迫する問題となった。
- ・膨大な慢性失業・半失業＝過剰人口の存在は、迫りくる恐慌と体制の危機に関連して資本主義国の異常な関心を引き起こした。

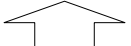


- ・第一次大戦後一九一九年、ILO（国際労働機構）の創設とともに、移民委員会が設けられることになったことも資本の危機の現れ。
- ・戦後における移民問題がまずヨーロッパの過剰人口に関連して取上げられるに至ったのは、アメリカにとってのヨーロッパのもつ政治経済的ならびに戦略的地位の重要性にもとづく。
- ・同時にそのことはアメリカを支柱とする西欧帝国主義諸国の世界支配体制の危機を反映したものである。
- ・以上のことはまた日本をも決して例外とするものではなかった。
- ・敗戦以来影をひそめていた移民問題は、講和条約の発効による国際経済への復帰とともに、ふたたび頭をもたげはじめ、一九五三年来加速度的にその対策が急がれるにいたった。

・それはアメリカに従属する日本資本主義の諸矛盾の進行によって生み出された農村における潜在的過剰人口の集積と、都市における慢性的過剰人口の集積すなわち失業問題の急迫化とその時を同じくするものであった。

そして一九五二年来五〇〇〇名（呼びよせ移民を入れるとほぼ一万名）に上る移民が、現在わが国にわずかな移民の窓を開いている中南米とくにブラジルに送り出された

・しかしこの三ヵ年の移民総数は、戦前（昭和七・九年）旧植民地を除く、移民渡航者年間平均数の三分の一にも連していない。



移民吸収力減退の論理は、ここにも明確な例証をわれわれにあたえている。

移民の安全弁はいっそう閉ざれている！

- ・しかしヨーロッパにおける移民問題の拾頭が第二次大戦後一つの質的な変化をとげたのと同じように、日本における移民問題もまた一つの転化をとげている。

それは現在の移民政策が実にアメリカ帝国主義の世界支配体制の一翼として打ち出されているという点である。

## 第二節 日本移民の展開過程 - その特質と変化

- ・わが国における本格的な移民の開始

- ・明治一四年（一八八一年）からの松方デフレ政策によって、物価が下落し、産業が沈滞し、一方、地主的土地所有が自由民権運動の退潮の中に確立し、**農民の貧困と「下級労役者の貧困が問題視されるにいたった明治一八年、政府によるハワイ契約移民の送出しにはじまる**と**いって過言ではない。**

- ・しかしこの時期にはいま一つの主要な移民の流れがあった。

**それは朝鮮への渡航である。**

- ・その後日本移民形態を特徴づける二つの方向への移民の流れは、
- ・すでにこの産業資本の成立期において、その萌芽的な原型を現わしていた

日清戦争後移民保護法の制定（明治二九年（一八九六年））

（移民を保護するのではなくたんに移民会社を取締る法律。この法律はその後根本的にはなんらの改善もなく二、三の改正を経て現在なおも存続）

治安維持法の制定（明治三三年（一九〇〇年））

- ・移民は日新戦争前に比べ数倍に上る跳躍を示す。
- ・この時期における移民の流れは、明治四〇年日米紳士協定・日加協定により移民が制限されるまでの間、ハワイ移民の延長線上にあった。
- ・日露戦争当時（明治三七年）西川光次郎が『週間平民新聞』四四号において、移民は結局労働者の搾取を、一国の資本家の手から他国資本家にうつすにすぎず、決して貧困の解決策にならないと移民に反対していることは特筆すべき。
- ・第一次大戦後大正七年（一九一八年）の米騒動、九年の反動恐慌、アメリカ、カナダの移民禁止とともに、政府は東西両方向に対する積極的な移民政策の実施を迫られた。
- ・一方、日露戦争後増加しつつあった旧植民地誠に対する移民政策としては、とくに農業移民については

- ・まず樺太において明治三元年（一九〇六年）

- ・台湾において四二年より官営農業移民事業が開始

（ただし台湾は大正六年失敗休止）

- ・朝鮮については同じく四二年より東洋拓殖（株）による大規模な農業経営と日本農業移民の招致援助が開始

- ・満州については大正三年より満鉄による守備隊満期営長者の設定を基点とし、大正六年前記東拓の満州進出、大正一一年には満鉄系の東亜勸業会社の設立、昭和四年満鉄出資による大連農事会社の設立等一連の農業移民政策が遂行

しかし満州農業移民政策が本格化するのには満州事変以後に属し、このとき以後政策の重心は他の諸地域に比べて圧倒的な位置を確保することになる。

その傾向はブラジル移民法の改正（昭和九年）による入国制限によっていっそう拍車をかけられることになる。

### 満州重点主義への移行

#### ・移民の形態的特質

##### ・東への移民

すなわちハワイ・アメリカ本土・メキシコ・カナダをへてのちブラジルに向けた移民の流れは、その形態上農業移民を中核とし、漁業移民がこれにつぎ、その他はいたって少なくとくにブラジル移民についてはそのほとんどが農業移民

##### ・旧植民地圏に対する移民

農業、漁業移民は少なく、遂に公務員・工業・交通業労働者・商業従事者が圧倒的な割合をしめし、その大部分は都市に集中していた。

#### ・東への移民において農業移民が中核をしめ、その他の業種への転換ができなかった理由

・移民の資力の貧困と先住せる欧米人による工業支配と圧迫が農漁業以外への日本移民の進出を阻んだからであり、農業においてはなお手の労働がその主要なる競争条件であり、日本移民の安価にして過重なる労働が移住国での圧迫にもかかわらず、相対的に生活水準の高い欧米農業者に対し優位を示すことができたからであった。

・一方、旧植民地圏への移民において農業移民が少数に留ったのは？

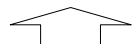
##### 第一

- ・これら地域への移民は国家権力と資本を背景とする帝国主義的侵略・支配とともに付随して移住したもの（移民よりむしろ植民）
- ・強固な統治機構と近代的な工業・交通業・鉱業・信用組織等々の整備、遂行が一定の教育と生活水準を前提とする点からいって日本移民はまずこれらの機構
- ・産業部面に吸収されたからであった。

##### 第二

- ・これら機構と資本による産業支配は逆に土着民族産業を圧倒し、その衰退を余儀なくせしめ、かれら植民地の人民を逆に農業に固定せしめることとなり、かれらのいっそう劣悪な生活水準と労働条件のもつ競争力に対抗することが農業移民の場合困難であった事情に起因する。
  - ・これら農業移民は国家の軍事力・資力を背景とする土着農民からの土地取り上げこ貝収の援助と、土着民を小作人とする地主的土地所有の構築（高率現物小作料の収取 = 内地寄生地主削の延長）の上にはじめてその地位を保持していた
- ・旧植民地農業移民政策が困難にもかかわらず重視されたのは？

- ・いうまでもなく土地支配と定着による国防的意義が重視されたから
- ・たんなる過剰人口救済以上の意味をもっていたからである。



- ・満州事変以後における農業移民政策の遂行もソヴィエトに対抗する「北満の護り」としての重要性をもつものであった。
- ・しかしそれら農業移民が手厚い保護にもかかわらず、決して成功をみなかったのも



土着農民の抵抗とともに先記せる事情に基盤をもっていた。

・二つの異った形態の移民は一つの共通した特徴

- ・いずれも半封建的な日本資本主義の矛盾それ自体の産物にほかならなかった
- ・そしてこれら移民の大半は地主的土地所有およびそれと結合した資本の圧力によって土地を放棄せざるをえなかった貧農
- ・他の一端は同じ原因によって生み出された失業・半失業労働者であった。

小野経済学の特徴  
・大衆小説家、小説家、人文学者の直感力を借りて社会科学を論ずる

- ・ブラジル移民をえがいた石川達三の『蒼眠』  
(改造社、一九三五年、〔『石川達三作品集』新潮社、一九七二年、所収])
- ・満州移民をえがいた和田伝の『大日向村』  
(朝日新聞社、一九三九年、〔『和田傳全集』第四巻、家の光協会、所収])

日本農村の否定的側面こそが移民の起動動機をなすことを明確に示している。

・「土地は狭く、人口は多い」という実感とスローガンのもとに送み出され

・結局において窮乏の道を辿った移民の流れは、逆にそれらを生み出している真の諸矛盾の解決を抑制し、隠蔽し、地主的土地所有を温存するとともに日本帝国主義そのものを存続せしめた安定要因にほかならなかった。そしてまた「移民の必要」こそこの帝国主義的進出を合理化する巨大な基盤であった。

それゆえ東と西において相異たるかにみえる移民形態・政策もまた帝国主義政策の一環をになう効能をもっている点においては、その母体を等しくする双生児に他ならなかった。

(注 土地の狭小と人口過剰による移民の必要から帝国主義的進出を合理化する見解に対する最初の明確な駁論として幸徳秋水『帝国主義』(岩波書店、一九〇一年、岩波文庫版、七六-七九ページ)参照。

・日本移民についてみられるいま一つの共通の特徴はその数的貧弱性

これらの諸国(イギリス・アメリカ・イタリア-報告者)が移民によって過剰人口を救済し解決したのでないが、わが国の数的な劣位は人目問題解決の手段として移民問題の無力性をいっそうよく明示している点で特徴的である。

・この移民数の相対的貧弱の原因

・第一にわが国がおくれて資本主義化の道を歩みはじめ、過剰人口の流出が問題視されたころ、すでに資本主義が帝国主義段階に突入し、欧州移民たるイタリア移民以上に日本移民の流入を阻止した

・第二に旧植民地に対する進出それ自体も世界的な不況の圧力に加速された植民地の窮乏=慢性的過剰人目の形成によって、遂に日本移民を吸収する余地を少なくした

・第三に日本の半封建的な地主制が、農村における階層分化と農民の土地からの解放を遂にさまたげ、このことが日本移民に出稼的な形態を与えると同時に、むしろ潜在的過剰人口の巨大なプールたる役割をにないうる可能性を農村に与えたからでもあった(もちろん、このことは資本主義の発展、矛盾の深化とともに変化したが)。

・このように日本帝国主義の生みだした移民必要の論理は、また自らの力によって移民縮

小の論理を形成せしめるのであった。

- ・ 第二次大戦後において日本移民問題はいかに変化をとげたか。
  - ・ 敗戦は旧植民地域からの三百数十万に上る引揚者（軍隊を除く）により、七八年間にわたる西への移民を一挙に日本におしかえした。

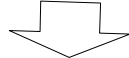
西への窓は閉ざされた。

- ・ 現在の移民を特徴づけるものは、たんに移民数の減少にあるのではない。  
現在の移民を特徴づける第一の特質は
  - ・ まず原因における変化である。
  - ・ 結論的にいって、現在の移民原因がアメリカへの従属によってもたらされた諸矛盾を基礎とし、その影響をもっとも強くうける階層が移民するという点
  - ・ 第二にその移民について直接・間接的なアメリカの援助が行われている点

アメリカの指導と援助をもっとも端約に物語るものは沖縄の場合であろう。

- ・ 従来沖縄は代表的な移民県であった。
- ・ 戦後アメリカによる支配と軍事基地化は沖縄の多数の人々の土地を奪い、悲惨な状態に陥っている
- ・ アメリカはこの点について特別の移民援助を行っている。
  
- ・ アメリカは沖縄問題がしだいに日本国内の世論の対象となりはじめた昭和二九年、渡航費および営農資金を貸付ける移民金融金庫を沖縄に設置せしめ、これに対して一六万ドルの出資を行い
- ・ さらにその送出先国たるポリビアに対し後進国開発援助計画に基づく経済援助費四〇〇万ドルの一部をさいて沖縄移民の入植にあてしめている。

まさにこの場合、沖縄移民はポイント・フォアの一環をになうものとしてアメリカの後進国支配に奉仕するものとなっているのである。



- ・ このように戦後における日本の移民問題は、かつて日本帝国主義政策の一環としての地位から、その主人をかえて登場しているのである。それはアメリカ従属軍事体制 = アメリカ帝国主義の一翼としての役割をいま、担っているのである。

小野の論点の要約

つまり、戦後のアメリカによる沖縄移民政策とは、カネをやるから住民に沖縄から出て行ってくれ、という政策だった。

## むすび

「人口は多く、土地は少ない！」たしかに日本人は、小学校以来教えこまれたこのテーゼを実感をもってうけとることに慣れている。



しかしこのテーゼは真実であろうか。

一般に古くからそして今なお貧困の、また移民原因の中心におかれているこの常識は、残念なことに真実ではない。

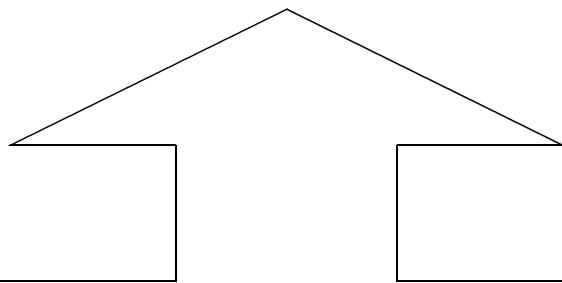
「人口が多く、土地が少ない」ということは、この場合むしろ失業者・半失業者が多く、

しかも土地の拡張と改良が放棄されているということにほかならない。

・土地の拡張と改良を放棄し、さらにいっそう現耕地の荒廃と縮小をもたらし、同時に相対的過剰人口を生み出すものはなにか。

・一つの絶対的な「土地」あるいは「人口」の量ではなく、むしろ従属化と軍事化をたどる日本資本主義の機構そのものであることは明らかであろう。

「そして移民対策は、まさに自己を生み出したその機構を維持し、温存する一手段に他ならず、決して移民それ自体を窮乏から救済する手段でも、また母国人民の貧困と人目過剰を救済する手段でもありえない。悲劇をもって蔽われた日本移民史は、このことを明示している。それゆえ移民問題の真の解決は、人口問題の解決と同じく、たんに産児制限や移民政策の遂行、あるいはその改善の中にあるのではないこともまた明らかである」(一六ページ)



#### 小野移民論の論点

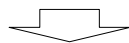
- ・戦前の特に旧植民地圏の日本移民政策は、フロンティア・スピリットではなく戦後処理政策であった。
- ・それは、平和時の軍事戦略である。また、今日的な言葉で言えばPMC(民間軍事会社)要員のものも含まれていたといえる。
- ・日本移民政策は常に白人優位主義によって、振り回されていた。
- ・戦後の沖縄移民は、アメリカ帝国主義戦略の一環である。

#### 小野 一郎 研究を 発展させる 研究とは？

##### 歴史分析

- ・公文書・外交文書の綿密な調査
- ・当時の新聞、雑誌などの調査
- ・当時の流行、風俗の調査
- ・当時出版された文芸小説・大衆小説の検証

・ただし、文学部のように作品そのものの評論ではなく、この作品群が時代の産物である、との認識に立って検証する。



1. 著者の思想の時代的背景 体制派だろうと反体制派だろうと時代の子である。
2. 作品に出てくる歴史的イベントとの関わり合い

その時代背景から当時の庶民感情(不安、歓喜の状況など)を浮き彫りにできる。

3. 作品に出てくる風習、風俗に焦点を当てる

当時の生活様式から当時の庶民行動がわかるとともに、今日では想像できない対外的な対立点も浮き彫りになる。

今後の発表予定（時間があれば以下のうちのいずれかを発表）

- ・小野一一郎「日本帝国主義と移民論 - 日露戦後の移民論 - 」
- ・ドナルド・ウィンチ『古典派政治経済学と植民地』
- ・E・Gウェイクフィールド『資本主義と近世植民地』



世界に誇る京都大学のJ.Sミルとマルクス研究

J.Sミルとマルクスの対比をウィリアム・トムソンを仲介に研究  
('経済理論'研究)

杉原四郎

J.Sミルとマルクスの対比をE.Gウェイクフィールドを仲介に研究  
('世界経済論'研究)

本山美彦